

## □ 統括的展望

### 東条 碩夫

#### ●全国各都市の音楽活動の活性化

2015年も、各都市のオペラやオーケストラには、目覚ましい活動が見られた。

オペラでは、北海道二期会が1月18日に札幌コンサートホールkitaraで、50周年記念として「アイダ」を上演した。ワインヤード型の会場に必要な最小限の道具と照明効果を施し、さらに衣装付きで演技を加えるという大がかりなプロダクションで、岩田達宗が要を得た演出を行ない、牧村邦彦指揮の札幌響が好演、岡崎正治（ラダメス）らが熱唱を繰り広げて記念上演を飾った。オペラを正規の形で上演できる大劇場が未だ無い北海道において、このように可能な範囲の手法を駆使してグランド・オペラを紹介しようという試みは、大いに意義のあることだろう。

一方、関西では、関西二期会が2015年秋に50周年記念を「ドン・カルロ」で祝ったばかりだが、2015年の上演の中では、「アンドレア・シェニエ」（6月）が映えた。特にダブルキャストの2日目は、藤田卓也、尾崎比佐子、油井宏隆らが、国内上演でもトップクラスに入る見事な歌唱で充実の上演をつくり出していた。また「みつなかオペラ」は、500にも満たぬ客席数と30人前後収容のオーケストラピットでありながら、倉橋日出夫によるリダクションの管弦楽編成を生かし、通常の上演に劣らぬたつぷりとした音のパワーを備えた「ノルマ」を上演、牧村邦彦の指揮と、尾崎比佐子、木澤佐江子、藤田卓也、片桐直樹らの卓越した歌唱で、極めてバランスの良いプロダクションを実現し、気を吐いた（9月）。びわ湖ホールでは、芸術監督・沼尻竜典の指揮で「オテロ」（3月）や、沼尻の自作「竹取物語」（8月）などを上演、また兵庫芸術文化センターのオペラも芸術監督・佐渡裕のプロデュースのシリーズで「椿姫」を、斬新な映像演出の試みを加えて成功させた。その他、筆者は観られなかったが、大阪音大のザ・カレッジ・オペラハウスでは下野竜也指揮と岩田達宗演出で「ファルスタッフ」を上演（10月）して好評を得、また中型ホールの舞台を活用した演出でオペラを行なうのが売りのものいずみホールも、河原忠之指揮、高岸未朝演出による「魔笛」を上演（11月）して、これも絶賛を集めた。さらに広島では川瀬賢太郎指揮広島響で細川俊夫の「リアの物語」を再演（2月）、四国二期会も「こうもり」を牧村邦彦指揮と井原大樹演出で制作（8月）。長崎県オペラ協会は錦かよ子作曲の原爆被災をテーマにした「いのち」（2013年8月に長崎初演）を、星出豊の指揮・演出により東京に進出し上演するという意欲を示した（7月）。同じく創作オペラでは、名古屋二期会が45周年記念委嘱作品として中田直宏作曲の「宗春」を、矢澤定明指揮、西川右近演出により初演した（10月）。台本と音楽にはやや冗長に陥る部分も感じられたが、力作には違いない、今後の積極的活動へのステップとなることを期待したい。

オペラ団体と同じように、各都市のオーケストラも意欲を見せた。たとえば仙台フィルは、東日本大震災後に繰り広げた救援活動などを通じて、「音楽を聴きに來なさい」ではなく「音楽をみんなに届ける」という意識が楽団に芽生えたことを述べていた（2015年10月19日の記者会見）のが注目される。同楽団が常任指揮者バスカル・ヴェロによるコリリアーノやグラスの

作品に加え、ロドリゲスなどラテン系の作品を併せて組んだ極めて個性的・意欲的なプログラム（3月）などを展開しているのも、その姿勢の一環ということができるだろう。その他にも、名古屋フィルが下野竜也指揮で松村禎三とブルックナーの各「第1交響曲」を（3月）、大阪フィルが井上道義の指揮で石井真木の「モノプリズム」とコーブランドやグローフェの作品を（4月）それぞれ組み合わせ演奏。また飯守泰次郎指揮関西フィルはメンデルスゾーンの大作「聖パウロ」を上演（4月）、大阪響は寺岡清高の指揮でドヴォルジャークの交響詩5曲を一夜に演奏するという珍しい企画を組んだ（5月）。広島響は秋山和慶の指揮で8月の「平和の夕べ」コンサートにアルゲリッチを迎えベートーヴェンの「第1協奏曲」を演奏、これに「世界の調和」を組み合わせ、レズニークの「ホロコースト」の一章を朗読で挿入するという「戦後70年」に関連のある企画を実現、さらにこれを東京でも公演して大きな話題を集めた。なお九州響も下野竜也指揮で三善晃の「夏の散乱」（広島・長崎への原爆投下と空襲をイメージにした作品）と「焉歌・波摘み」（対馬丸事件を題材にしたもの）を取り上げ、次いでバッハ＝レーガーの「おお人よ、汝の大いなる罪を嘆け」を演奏してからシュニッケのオラトリオ「長崎」に移るといったプログラミングの妙味を利かせ、全国に誇るにふさわしい企画を成功させている（7月）。

この他5月には、長崎県初のプロオケであるOMURA室内合奏団が東京公演を行なって健闘ぶりを示し、中部フィルも創立15周年記念演奏会でマラーの「復活」を演奏するなど、新参のオーケストラの積極的な活動も注目されるだろう。また4月22日に大阪のフェスティバルホールで、大阪フィル、大阪響、関西フィル、日本センチュリー響のいわゆる「大阪4大オーケストラ」が一堂に会し、同一のステージで順番に演奏するという奇抜なイベントを開催した。いかにも「関西のノリ」的企画だが、そこで各楽団がふだんの定期を凌ぐ優れた演奏を競演し合ったことは興味深いだろう。

#### ●東京のオペラ界にみられるレポーターリー

もちろん、東京地方のオペラ界、オーケストラ界も活発な動きを見せている。オペラでは、神奈川県立音楽堂が開館50周年を記念して企画主催した音楽堂バロックオペラ、ヴィヴァルディの「メッセニアの神託」が、ファビオ・ピオンディ指揮エウロパ・ガランテの卓越した演奏と、弥勒忠史の日本風演出で大きな成功を収め、絶賛された。泰西のオペラ演出に日本風のアイデアが盛り込まれるのは興味深く、かつての若杉弘が「サロメ」を、サヴァリッシュが「影のない女」を歌舞伎の手法で上演したのと同様、固定観念的な様式に囚われないこのような試みはもっと多く行われてもいいはずである。一方、紀尾井ホールも開館20周年記念としてベルゴレージの「オリンピアード」をホール・オペラ形式として上演し成功（10月）、神奈川県民ホールも黛敏郎の「金閣寺」を下野竜也指揮、田尾下哲演出で久しぶりに上演し、多くの点で称賛された（12月）。日本オペラ協会も「袈裟と盛遠」を上演、柴田真都指揮のフィルハーモニア東京が好演したが、これは演出にやや難があった（3月）。東京オペラ・プロデュースもヴォルフ＝フェラーリの「シンデレラ」（2月）、アルファードの「復活」（7月）など、日本初演作の路線を続けている。なお東京二期会が菅尾友演出によるコミック的なスタイルの「エジプトのジュリオ・チャーザレ」（5月）、プロジェクション・マッピングの技術で大規模に活用した宮本亜門演出「魔笛」（7月）など、従来の殻を破った舞台を制作したことも興味深い。

#### ●演奏会形式オペラ上演の良さ

これらの流れの中で、各地とも「演奏会形式オペラ上演」に多くの成功例がみられたことも注目してよいだろう。宮崎国際

音楽祭では広上淳一指揮で「トゥーランドット」を（5月）、仙台フィルも山田和樹指揮により「椿姫」を上演（7月）。東京フィルもパティストニ指揮で「トゥーランドット」を（5月）、「東京・春・音楽祭」はマレク・ヤノフスキ指揮N響で「ヴァルキューレ」を（4月）、東京オペラシティはサーリアホの「遙かなる愛」を日本初演（5月）、新日本フィルはデリック・イノウエ指揮で「青ひげ公の城」を（9月）、東京フィルもプレトニョフの指揮でリムスキー＝コルサコフの「不死身のカッシェイ」を（10月）をそれぞれ上演した。最も絶賛を浴びたのは、カンブルラン指揮読売日響による「トリスタンとイゾルデ」（9月）であろう。レイチェル・ニコルズ（イゾルデ）らが見事な歌唱を聴かせ、やや淡白な表現ながらも音楽が本来持つ力を最大限に発揮させ、ワーグナーの音楽の魅力を純粋な形で聴衆に伝えたのだった。筆者もこれらの上演の全てに接したが、中途半端な演出に気を散られることなく音楽をじっくりと楽しめるといっても、この演奏会形式上演の良さを痛感した次第である。

### ●東京のオーケストラに関するレパトリー論議

前年の話になるが、2014年12月9日、文化庁と日本オーケストラ連盟主催のオーケストラ・シンポジウムが国際フォーラムで開催され、米、英、仏、独の批評家による日本のオーケストラ演奏会を聴いて感想を述べあう場が設けられた。そこでは、「日本のオーケストラは、演奏に活気が、また楽員には自発性と積極性が不足している」という指摘が多かった。これに対し、それはある意味では的を射ているかもしれないが、別の側面から見れば、日本の緻密さ、均質性、叙情性といった特徴を備えた「日本的なスタイルの演奏」が、いつか世界のオーケストラ界に重要な発言権を得る時代が来る可能性もあり得るのではないか——というのが、日本側のパネリストとして出席した筆者の意見だったのだが、これについてはたった一人、米国の批評家スウェッド氏が個人的に賛意を表した程度にとどまった。また中には、「日本のオーケストラのレパトリーは狭いようだ」という発言もあったが、これには筆者が具体的なプログラム例を挙げて反論した。

たしかに、在京オーケストラのレパトリーは——程度の違いこそあれ——昔よりは拡大しているだろう。2015年においても同様である。とりわけジョナサン・ノットを音楽監督に迎えた東京響は積極的で、リゲティの「ボエム・サンフォニック〜100台のメトロノームのための」をプログラムに加えた定期（11月）などは企画面で大きな話題を集めたものだが、実際の演奏においてもウルバンスキの指揮したルトスワフスキの「第4交響曲」（5月）などは高く評価された。また大野和士が4月に音楽監督に就任した東京都響も定期におけるレパトリーの拡大路線では随一というべく、リントゥの指揮で一柳慧の「デアスポラ」（都響委嘱作品、世界初演）とルトスワフスキの「チェロ協奏曲」（1月）、ダウスゴーの指揮でサーリアホのクラリネット協奏曲とニールセンの第3交響曲（5月）などを演奏、また定期ではないものの、サントリーホール「サマーフェスティバル」（8月）において、大野和士の指揮で聴かせたツインマンの「レイクエム」も高く評価された。一方、読売日響は、ロト指揮でブーレーズの「ノタシオン」抜粋とハイドンの「十字架上の七つの言葉」など（7月）を、下野竜也指揮でヒンデミットの「白鳥を焼く男」とアダムズの「ハルモニレーレ」（11月）を出して気を吐く。新日本フィルはメッツマッハー指揮でヴァレーズの「アメリカ」「アルカナ」を演奏（4月）、日本フィルは山田和樹指揮でミヨー、イベール、別宮貞雄などの作品を集めた（9月）。また定期ではスタンダードな名曲ばかりを組んでいたN響すら、パーヴォ・ヤルヴィの首席指揮者就任を機として、多少はレパトリーの開拓を図る動きが見ら

れる。なお、各地のオーケストラの中では、前出の大阪響が児玉宏と寺岡清高の指揮で、非常に意欲的なレパトリー開拓路線を進め続けたことが注目されよう。

ちなみに、これら日本のオーケストラの積極的姿勢に対して、来日オーケストラは、どれも軒並み、啞然とさせられるほど同じような傾向のプログラムばかりを並べているのが最近の傾向だ。たとえば、マーラーやブルックナーやチャイコフスキーの特定の番号の交響曲、ブラームスの交響曲、チェコのオーケストラは「新世界交響曲」ばかり——これらはいずれもオーケストラ側の意向ではなく、招聘元のチケット売れ行きを慮っての結果なのだが、これでは日本の音楽界のためにならない。もう少しやり方を考えてもいいだろう。

### ●戦後70年にちなむ企画

戦後70年に当たる2015年、音楽界でもいくつかそれに因んだ企画が登場した。既出の下野竜也指揮九州響の「平和への祈り」、長崎県オペラ協会の「いのち」などの他にも、高関健が広島響を指揮して「2つの交響曲HIROSHIMA」——アールトネンの「交響曲第2番」の60年ぶりの日本における蘇演と、團伊玖磨の「交響曲第6番」の、いずれも「HIROSHIMA」と題された交響曲を広島で演奏した（11月）。なおアールトネンの交響曲は、井上道義指揮大阪フィルも大阪で演奏している（同）。

大きな話題は、ザ・シンフォニーホールにおける信時潔の「海道東征」と「海ゆかば」の蘇演である（11月）。これは信時潔没後50年記念として、北原幸男指揮大阪フィル、大阪フィル合唱団、大阪すみよし少年少女合唱団他により演奏された。「海道東征」は神武天皇の東征を題材にした北原白秋作詩による50分近い長さの「交声曲」で、「皇紀2600年」とされていた1940年（昭和15年）に日比谷公会堂で初演されたものである。「八紘一宇（あめのしたひとついへ）」などの記述を含む、古くから存在したこの日本独特の神話伝説が、明治以降、軍国主義に利用される運命を辿ったのは不幸だったが、それを題材にしたこの作品が日本の純音楽における注目すべき存在であることは客観的に見ても疑いのない事実であり、その蘇演を純粋に音楽的価値から聴くのは意義のあることである。ただ、当日のように、登壇した解説者が「日本人の意識云々」を説き、「海ゆかば」を聴衆に起立して一緒に歌うことを奨めるというのは、見方によっては、このコンサート自体がある史観の意識発揚イベントのごとき様相を呈してしまいかねないだろう。なお「海道東征」は、同月28日にも東京藝大音楽堂で演奏された。

### ●作曲家記念年

モーツァルトやベートーヴェンならともかく、それ以外の作曲家については、たとえフェスティバルをやっても集客に役立たないという考え方があるのか、わが国では概して「記念年」のプログラムは低調である。その中で、2015年に辛うじて目立ったのは「シベリウス生誕150年」であろう。日本フィルはインキネンの指揮で以前からマーラーの交響曲との組み合わせでシベリウスの作品を連続演奏して来ていたが、4月には「4つの伝説曲」などによる特集プロを組んだ。また尾高忠明と東京シティ・フィルも同曲および「ヴァイオリン協奏曲」などを演奏（9月）、秋山和慶と広島響も交響曲の「第3番」「第5番」などを特集したプログラムを演奏した（11月）。交響曲全曲ツィクルスは、ハンヌ・リントゥ指揮新日本フィルおよびフィンランド放送響、ヴァンスカ指揮読売日響、オッコ・カム指揮ラハティ響が、それぞれの持ち味を發揮して展開ファンを集めたが、この3つのツィクルスが11~12月に集中したのは不思議であった。